翻　訳

シリル・スミス『最良の時代を迎えたマルクス』（ロンドン，プルート出版，1996年）「序文」「第3章　社会化された人間性の観点」

西　野　勉

目　次

Ⅰ　訳者前書き
Ⅱ　著者序文
Ⅲ　第3章　社会化された人間性の観点
(1)　カール・マルクスと人間性
(2)　非人間的な形態における人間性
(a)　疎遠な世界
(b)　我々自身からの疎外
(c)　マルクスと経済学
以上本号

以下次号
(d)　富と価値
(e)　『経済学批判要綱』においてマルクスは次のように富を説明する。
(f)　歴史とは何か？
(g)　階級闘争
(h)　国家 ── その原因と救済
(3)　疎外の止揚
(a)　人間的に生きるということ
(b)　革命とは何か？
(4)　結　　語

Ⅰ　訳者前書き

Cyril Smith, Marx at the Millennium (London: Pluto Press, 1996.) の「序文」

と「第3章」をここに訳出するが，その訳出の動機と訳出の意義について，思うところを簡単に述べておきたい。

東欧諸国およびソ連の体制崩壊それ自体は，少し時間をおいて考えてみれば，当然のことと考えられる。しかし，いわゆる「現存社会主義」の成立と崩壊という歴史的出来事をどう受け止めるか，ということは，私にとっても一つの重大な問題であり続けている。

私は，長い間，資本主義の成果の基礎上にマルクスが展望していたことは何だったのか，ということを問う「個人的所有」「再建」問題に関わってきた。この問題を，私は，マルクスがあの驚嘆すべき研究営為を通じて，資本主義という歴史的社会をどのようにとらえたのか，そこから何を展望せざるをえなかったのか，という問題として設定し直し，通説等々に囚われない自分自身の探求の成果を『経済学と所有』（世界書院，1989.）にまとめ，その後の研究の前進を含めて「『資本論』の資本主義認識と歴史変革」（『経済』1997. 10.）に簡潔な要約を果たしておいた。

私の研究から言って，ソ連がマルクスの展望した「社会主義」だったなどと言うことは到底出来ない。「国家資本主義」だったと言うことも出来ない。むしろ崩壊後こそが「国家」が主導して資本主義化を進める体制という意味での「国家資本主義」と言うべき体制であろう。レーニンは「社会主義」を目指そうとした。しかし，スターリンが指導者として押し進めた事態は，歴史的諸条件の制約ということを考慮に入れても，根幹のところで非人間的な全体主義的な「戯画化された社会主義」以外の何ものでもなかった。「非人間的な社会主義」などというのは形容矛盾であって，そういうものは社会主義ではありえない。マルクスの資本主義変革の願望と展望は人間的な社会をということであったのである。しかし，旧ソ連について，さしあたってここでこれ以上を言う必要はない。

問題は，この著者が「序文」で言っているように，この著者の活動を含めて，資本主義という社会の非人間的ありようを拒絶し，よりよい人間的な社会を求めて闘ってきたこの間の良心的な人間たちの革命的諸活動は，「継続されて行く価値のある」ものではあるが，「その価値を維持したいと欲する」なら，この間の「マルクス主義」の「思考体系全体が厳密な批判に委ねられなければならない」ということである。

著者は，1950年頃から約30年間トロツキストグループに属して活動してきた人である。著者は，自らの活動と20世紀の革命運動の意義を問い直すために，再度マルクスを勉強

し直した結果，トロツキーをもその批判の対象に当然含むところの従来の「マルクス主義」について，それが「厳密な批判」にさらされなければならないということを自覚せざるをえなかった。そして，この苦い自覚に立って，それを遂行することを自らの歴史的使命と考え，それに突き進んでいるのである。私は，著者のこの誠実なあり方に何よりもまず訳出のインセンティブを与えられたのであった。

著者は，その際，何よりも重要なこととしてマルクスを「マルクス主義」から解き放つことを強調する。著者の本意は，訳出「序文」から窺って頂きたい。

著者は，この著作の第2章で著者が言うところの〈マルクスからの「マルクス主義」の分離・生成過程〉を扱っているのであるが，訳者自身がにその過程をつまびらかに出来ていないため，その訳出を初めから諦めた。第4・5章については，時間の関係でまたの機会に譲りたいと思っている。

この本の表題をどう訳出するかには多少迷いがあった。「最良の時代を迎えたマルクス」というように訳しておくが，その「最良の時代を迎えた」ということの意味するところは大きく二つある。一つは，「マルクス主義」的歪曲から解き放たれる条件を得た時代という意味であり，もう一つは，マルクスが全生涯をかけた研究によって自己のものにした「社会化された人間性の観点」こそは，21世紀の社会変革運動にとって益々重要性を増してくる観点だという意味である。

この著作の最大の章をなす第3章を訳出する意味は，著者がその重要性を強調して止まないこの「社会化された人間性の観点」そのものが，そこでのテーマとなっているからであることは強調しておきたい。

勿論，私が著者の言うところをすべて正しいと思っているわけではないが，この「社会化された人間の立脚点」の強調は，疑いもなく正しいといわなければならない。

著者の問題点について一言いっておくとすれば，資本主義という人類の歴史段階をマルクスがどう解明したかについての著者の接近の仕方には，マルクスが前資本主義段階から資本主義への転化をどのような点において掴み出したかについての研究が欠如しているように思われるということである。これは重大な欠陥であり，そのために著者の議論が多少観念的なものになっているいることは否めない。しかし，著者のそうした問題点については別の機会に触れることもあろうと思うのでここではこの基本的な問題点の指摘だけにとどめておきたい。

PLUTO 出版からはこの訳出を『高知論叢』に掲載する許可を得ている。

＊なお，脚註のマルクス・エンゲルスの諸著作についての略記は，著者の典拠表示にしたがったもので，以下の通り英語版からのページを記してある。

① 〈『資本論』第 1 部：数字〉は、〈Penguin 社の1976年英語版『資本論』第 1 部：ページ〉

② 〈『資本論』第 3 部：数字〉は、〈Penguin 社の1981年英語版『資本論』第 3 部：ページ〉

③ 『資本論』以外のマルクスの諸著作・諸論稿の場合、〈名称，数字：数字〉は，〈名称，1975-1994年 Lawrence and Wishart 社の英語版マル・エン全集の巻数：そのページ〉

1999年10月

訳者

Ⅱ 著者序文

人は，この書物を書くのに私が50年を費やしたと言っても良いかも知れない。私が熱心に労働党に結束する一学生として社会主義について考え始めたのは第二次大戦終末期の何時頃ことだったか定かではない。1945年労働党政府の選出は新しい世界を約束するように見えたが，間もなく私はアトリー政権の汚い妥協に幻滅を覚えるようになった。それは，明らかに幾百万の支持者の期待を見放すものであった。

そこで，1947年ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジに着いてから私はマルクスの諸著作を読み始め，共産党の会合に出始めた。そこには世界の体系的な理解の仕方があった。しかしながら，時はチトーおよび B. S. Haldane によって率いられた Biometry 派に対するコミンフォルムの攻撃の時であり，Lysenko 事件の真っ最中であった。私はぼんやりとスターリンの追随者達が，私に対しても自分たち自身に対しても，真実を語っていないということに気づき始めていた。

当時，彼らが特にロシアの歴史やその指導者達の運命やソ連の生活の性質について関心を持たなくなってきていたことは明らかだった。私は興奮をもってレオン・トロツキーの諸著作に向かって行き，1917年に始まった事業を続けるための彼の闘いについて何ほどかのものを学んだ。そこには社会主義の真の理論が完全に突き詰められた状態であると思ったのだった。我々のしなければならないことは，それを実行に移すだけだった。レオン・トロツキーは，私の学んだところによれば，ロシア革命についてのスターリンの裏切りに対して闘っている人々の中で最も重要な人物だった。彼は産業が国有になっ

たからという理由だけでスターリンのロシアが社会主義のなのだという発想を批判した。彼は，ついには生命を犠牲にすることになるその闘争において，ソヴェト国家機関の野蛮と退廃とウソが社会主義への移行とは正反対の状態にあるものということを広く示した。いずれにしても社会主義は単一の国家では不可能だった。

彼は，そのコミンテルンの早い時期に，つまりそのレーニン時代にコミンテルンの理論的基礎を信ずることを止めたことはなかった。だからこそ，第二次世界大戦後に出てくる産物とは違って，彼は早くからソ連の未来軌道を予測することが出来たのだった。我々トロツキストは，その時代の事態進行をトロツキーの理論闘争の理論的枠組みの中で，つまりコミンテルンの見地でうまく説明できると考えた。われわれはかれの諸著作をリプリントし，変化した戦後世界において彼の考えを応用しようと出来る限りの試みをした。

数十年に及ぶこの仕事を振り返って見て，私は，我々の考えや行動の幾つかが今日いかにグロテスクに見えようとも，それが前に進むための最悪の方法であったとは決して思わない。しかし，1995年においては，古い考えを取り繕い続けることはもはや何の役にも立たない。過去数年の出来事は，大変な世界の変化を体験し，世界に関する我々の見方を深く覆してきたので，はるかに劇的なことが必要となっている。

大抵，マルクス主義者は，ソ連の崩壊を導いた一連の出来事に対して二つのやり方のどちらかの一つの反応を示している。「マルクス主義は死んだ」という報告を受けたあるものは，そのニュースをその通りと受け入れ，単純にあきらめた。他のものは，まるで何もなかったかのように振る舞うか，あるいはすべては予測したとおりという振りをした。

これら二つの態度のどちらが1990年代の皮肉と堕落に対してより適合的か分からない。；英雄的教条主義でもって，我々がかつて言っていたことが，単に我々がかつてそう言ったという理由だけで，真実であるに違いないと主張することか，あるいは「マルクス主義者」が受け継いできた全作業を単純に錯覚として放り出すことか。これらのアプローチのそれぞれは ── そしてそれらは大いに共通しているのだが ── 我々の時代についての不正直な言い逃れである。そういうあり方ではなく，マルクス主義の伝統のあれこれの見地を固守してきた我々は，社会主義のための闘いの全歴史とそこから生じた理論体を今日再検証する義務を負っているとわたしは思う。

この仕事は，良心的な客観性と最大の注意をもってなされなければならない。レーニ

ン，トロツキー，ローザ・ルクセンブルグのような男女，かれらに従った幾百万の労働者達は，20世紀のブルジョア社会の野蛮な混乱状態から脱するために闘ったのであった。彼らは，資本主義の世界が我々人間の本性に相応しいものでありうると信じることを拒絶した。彼らは彼らの生涯を，よりよい社会形態を求める闘争に捧げたのだった。彼らはあらゆる知力を絞って彼らの革命的活動を一つの体系的な枠組みの中で把握しようとしたのだった。

この闘争の歴史は継続されて行く価値のあるものである。しかし，諸君がこの価値を維持したいと欲するなら，その遺産である思考体系全体が厳密な批判に委ねられなければならない。そうでなければ，諸君はマルクス主義の創始者達を侮辱し，彼等の仕事を聖典としてしまうことになる。必要なことは「マルクス主義」の教義全体を注意深く再検証し，我々が議論の余地がないと前提してきた考えのすべてを解き放ち，我々が不問に付してきた諸問題を問うことである。

この過程は，痛み多く，頭の中のきびしい再構築をともなうものである。しかし，この数十年を経て，私は，カール・マルクスの仕事の徹底的再検証がなされなければならないという結論に否応なく追い込まれてきた。私は，このことについて語る人が十分すぎるとは思わない。

読者の中には，私の叙述では，マルクスの考えと「マルクス主義」と呼ばれて来た教義との間の溝を誇張しすぎていると考える人がいるかもれない。もしそういうことがあるなら，このギャップを過小評価することの方が遙かに重大な誤りを犯すものだろうということを申し上げたい。

過去数年間，マルクスの諸著作を再読するにつれ，彼の省察が如何にひどく歪めれら来たったかを発見してショックを禁じ得ないできた。しかし，それ故に，マルクスと「マルクス主義」とをはっきりと切り離すことが，世界をより明瞭に理解する機会を与えることになるのだということが鮮明になってきたのである。「マルクス主義」の諸カテゴリーが，あらゆる問題を照らし出すことが出来るように見えた時とは劇的に異なった世界がそこにはあった。マルクスが「マルクス主義」の教義から解放されれば，彼が生きていた時代に対する彼の省察は，我々の時代の省察に驚くほど有意義になると思う。思い起こせば，労働者や学生の聴衆に対して『資本論』第１部について何時も語っていたあの1960年代においてさえ，私は，厳密に「正当派」で居続けていたのではなかった。

私は，1959年に1844年の『パリ草稿』の英語訳が出され時，それを読んだが，その著者マルクスは明らかに「マルクス主義者」でなかった。しかしその時は，私は自分にこう言い聞かせた。彼はこれを書いたときは青年だったのだと。しかしながら，1973年に，『経済学批判要綱』が出版されたときは遙かに深いショックをうけた。彼がそれを書いたのは40才台であった。私は一つのエッセイを書き[1]，この驚くべき仕事の中に私が発見した事柄についての「弁証法的唯物論者」の説明をするという容易でない試みを行った。

1970年代の私の講義では，『資本論』は「マルクスの経済学」ではなく，また「資本主義」について書かれたものでもないという理解にますます向かって行かざるをえなかった。それは他に何を含んでおろうと，主要なことは共産主義，真に人間的な社会について書かれたものだということである。70年代の終わりに，私は政治的活動から離れた。1980年代の始めにおける私の唯一の関与は，数学に関するマルクスの仕事の英訳を含む一巻の編集を助けることだった。この私の状態は，私を責めさいなんでいる疑問から逃げるため，真実の生活からあまりに遠ざかっているものだと私は思った。私は間違っていた。

私がかつて30年間属していたトロッキストグループは，1985年に分裂し，多くはその時代をめぐる左翼の明らかに自棄的なグループとして行動した。私は競技に復帰した。私は，自分がその生涯の半分以上にわたって行ってきたことが何であったのかを見つけだそうと決心した。私は，小さなブックレット[2]を書いた。それは，――表面をなでる程度だったが――「マルクス主義正当派」に突きつけられている諸問題を検討しようとしたものだった。

私はこの本の弱点を知りすぎるほど知っているが，私には，左翼についての議論を始めようという思いがあった。再び，間違いを犯した。驚き仰天したことに，20～30年間私と行動を共にした人たちが私と口をきくことを止めた。彼等はその古い理論的基盤の上で運動を「再建」することに関心を持っていて，私の掘り起こしの騒音は，この活動を妨げるだけだった。私は個人的にはこれに憤慨したが，それは，私にもっともっと深く掘り下げなければならないということを示唆した。私がよく理解していたつもりのマルクスの諸著作を再度読み直すことによって，私は自分がそれらを全くよく分かっていなかったことを発見した。

---

[1] C. S. Smith, 'Individual and Social Relations', Fourth International (January, 1974).
[2] C. S. Smith, Communist Society and Marxist Theory (London: Index Books, 1988).

必死にそれらを求めていると思われる新しい世代にマルクスの省察を普及する責任がある。これは，マルクスが何時も「正しい」とか，変りなく無矛盾であるとかいうことを私が信じていることを意味しない。私は善意の，無謬の，全能のマルクスを再発見しようとしているのではない。巨大な量の彼の書いたもののあるものは，殆どその時代的関心事のものであり，彼の声明の幾つかは単純に間違ってもいる。彼の最も重要な諸発見が正当に理解されている場合でさえ，それらは，我々の諸問題に対する出来上がりの解答なのでなく，諸問題を究明する際のよりよい道への指示器なのだというように考えられるであろう。私は，彼等がこの道に接した時，彼等が，今世紀の終わりに世界に立ちはだかっている諸問題について，如何に正確にそれらの核心を掴むに至るかを示すつもりである。

この書は次のように展開する。第１章は，今日の世界の簡単なスケッチであり，それが如何に混乱の中にあるかを示す。このことはかなり明白なことだが，しかし，より興味のあることは，すべての人が何か他の生活のあり方があり得るとは信じることが出来ないでいることを発見することである。何故そうなるのか？

我々は，マルクスがなそうとしていたことを見いだすことができれば，マルクスは我々が前進の道を見いだそうとするのを助けるであろう。しかしながら，第1に，マルクスの諸思想の上に山積みされた来た観念的瓦礫の堆積物が堀崩されければならない。第2章で私は，マルクスの見地を不明瞭にする「マルクス主義」の「公式的」「正当的」物語が発生したその過程を追跡した。

最高の嘘吐き，スターリン主義的カリカチュアは容易に処理される。しかし，それは，マルクスの仕事の精髄をすでに歪めてしまっている一体の教義の基礎上に，その変造を打ち立ている。これは，主要に，1914年以前の国際的労働運動の理論的指導者であったカール・カウツキーとゲオルグ・プレハーノフの所産であるが，それは第三インターナショナルを形成した人達によって受け入れられたのであった。（私は，エンゲルスの弱点がなんであろうとも，マルクスの変造の過程が主要にエンゲルスのせいだとする広く見られる主張に追随することを拒否する。）

この後で，私は，我々の時代にとってのマルクスの意義が何であるかの検討を始める。第3章は，マルクスの仕事は，第一義的に，人間存在の本質を把握し，現在の社会がその本質に対して疎外されてあるそのあり方を把握することに結びついたものだいうこと

を示そうとした。

第4章では，マルクスの人間性へのアプローチを哲学，経済学，社会学および自然科学のような学問研究がそれを研究する仕方と対比する。マルクスはこれらの学問が人間とは何かを描く試みにおいて，それらが疎外された生活そのものを如何に表現しているかということと共に疎外を如何に曖昧にするかを示したのだと，私は思う。

第4章の補論として，「科学と人間性－ヘーゲル，マルクスと弁証法」という論文を入れた。これの初出は，Journal of the Edinburgh Conference of Socialist Economists 15号（1994年4月）の "Common Sense" であるが，その再掲載の許可を受けたことに対して編集者に感謝している。

第5章では，「マルクス主義者」の包装から解放されたマルクスの諸思考が，現在の時代の諸問題の幾つかに対してどのような関係を持ちうるかを示そうとする。これらの諸問題に「答」を与えると厚かましく言うことは行き過ぎであろう。こう言うのは，私にその答が分からないという理由からだけではなく，それはマルクスの仕事が関わったことではないという理由からでもある。しかし，答ではなく，より重要なこと，つまり来る世紀において，人間性が避けて通ることの出来ないであろう諸問題の幾つかを鮮明にするということを，それは試みていると思う。より処方的な結論を追い求めている読者は，それを手に入れる道に招かれるであろう。

ここで私はトロッキスト運動の古い仲間に，彼等がこの仕事の成り立ちに与えた役立ちについて感謝を表明出来ればいいのだが。悲しいかな，出来ない。彼等は，私が何をしようとするかを知った時，その殆どは私と交流することを止めた。それは，私が彼等を不愉快にしたからである。しかしながら，幾人かの例外について触れておかなければならない。Tom Kemp は私の諸結論に不同意だったが，それらについて私と議論し続け，最近の死に至るまで勇気づけてくれた。Geoff Barr はこの仕事の幾つかのセクションの初期ヴァージョンに有益なコメントをくれた。Shiraz Kassam との多くの議論は至る所に反映されている。

全く違った方面の他の人々は，大変助けになった。私が共産党の一員で，熱心なトロッキストだった時知り合った Don Cuckson は，大変私を助けてくれた。彼は，彼自身の過去の理論的諸概念についての同様の探検航海に従事している。Piero Pinzaut は，彼は私の書いたことについては大部分賛成しないであろうが，にもかかわらず，それを書

く刺激を与えてくれた。彼のフレンツエ的熱烈さは，私が陥った哲学的轍から私を揺さぶり出すのに役だった。

Hayo Krombach はそのヘーゲル的見地のために私の立脚点からは遠く隔たっているが，ヘーゲルの仕事についての彼の深い見識の基礎上で私に貴重な援助を与えてくれた。Ute Bublitz，彼自身の見解が間もなく出版されると期待しているが，彼との長時間の議論は，マルクスの考えやヘーゲルの仕事との関係についての私の態度を形成する際に，本質的な役割を果たした。

Ute Bublitz, Tony Madgwick, Felix Pirani, Ben Rudder および Towfik Shomer の人達の当書の草稿へのコメントと批判は貴重だった。私が何時も彼等が私に期待するようには出来なかったことを残念に思う。これらの人々の誰もがこの本の多くの欠陥に責任を負わされることはないということを私が言うのは，普通の形式的な意味ではないのである。実際上，彼等のそれぞれは，私が言わねばならないことに不賛成だったし，この書の思考物は彼等に対する鋭い不同意の形成から生まれたものなのである。私は，彼等すべてに感謝している。

Cyril Smith

1995年１月

Ⅲ　３章　「社会化された人間性の観点」[1]

「豊かな個人…とは消費におけると同様生産においても多様で総体的である，そこでは，労働はもはや労働としてでなく活動それ自体の全面的な展開として現れ，自然的必要性はその間接的な形態のうちに解消される。；なぜなら，自然的な欲求は歴史的に生み出された欲求に取って替わられているからである。」[2]

(1)　カール・マルクスと人間性

我々は何であるかを把握することが，どのようにして可能か。この問いは，20世紀末

[1] フォイエルバッハに関する第10テーゼ，5：5。

[2] 『経済学批判要綱』，28：251。

のこの苦境を凝縮表現しているように私には思われる。私は，この問いへのカール・マルクスのアプローチの一端，つまり人間とは何であるかについての彼の概念を検討して見ようと思う。しかし，マルクスの諸結論は，彼がそれらの問題を考える考え方，つまり，**科学**とは何であるかについての彼の認識と不可分である。このことのについては，第4章で扱うであろう。

私は，マルクスのすべての作業は，この二つの問題とそれらの間の関係に集中していたのだということを強く主張する。彼は，困難な理論的諸問題に答を見つけ出そうとするようなある種の知的専門家ではなかった。彼は，**人間は人間的に生きるために何をしなければならないか**，という問いの文脈の中で諸問題と諸解決の両方を掴もうとしたのであった。

おそらく問いは，**人間性は，どのようにしてそれ自身の本質存在態に自らを形成しうるのか？** というようになされうるだろう。マルクスの歴史理解，現存する社会経済秩序の科学的表現としての彼の経済学批判，彼の倫理観，国家・階級闘争・革命についての考察，その共産主義社会についての概念，これらすべては，人間であるとはどういうことかについての彼の理解の仕方にその基礎を置いている。

マルクスは一つの固定的な永遠の「人間的本質」が存在するというようなことは信じなかった。「マルクス主義者」は，互いにとって何となくはっきりとしないこの真実をしばしば繰り返して来たために，マルクスがコミュニストであることを忘れてきた。「コミュニスト」という表現によって，私はこの用語を不法使用してきたところの国家や政党の政策や理論や行動を意味させようとしているのではない。私の言おうとしているのは，マルクスは彼の仕事を真に人間的な社会の達成，従ってまた，真に人間的な個人という考えの達成に集中したのだということである。

勿論，彼は，神とか**人類**の生物学的遺伝とかによって各人のために選び与えられた「人間的条件」とかいうような，前もって与えられた人間的本質などというものは存在しないということを知っていた。そうではなく，彼は，我々自身が人間の本性を産出してきたのだ考え，それを社会的諸関係の総体として概念的に把握したのであった。[3] 生物的，社会的歴史の経緯の中で，繋がり合った**活動**（**joint activity**）を通じて，人間個々

---

[3] フォイエルバッハに関する第6テーゼ，6：5。

人は彼ら自身と彼ら相互の諸関係を形成し，再形成してきたのである。

自己創造的であること，これが人間の類的特性なのである。人間とは自己創造的で，自覚的で，社会的であるところの自然の一部なのだということが出来るかも知れない。これは，勿論，一つの**定義**ではない。事実，その存在様式が自己を絶えず他のある物に形成しつつある状態にあるそういう存在に対して，一つの定義 ── 文字通りにいえば，一つの限定を置くこと ── を当てはめることは出来ない。さらにいえば，その形成の諸局面を調べてみるとそれぞれが他のすべての局面と関連し合っていることが分かるだろう。自らの本質を創り出して行く或るものについて何が語られうるか？ どのようにして一個人が社会的であり得るか？ 自然の一部がどうして意識的であり得，また，ただ一人自らを意識する存在で居られるのか？ 歴史を通じて，哲学者達はそうした疑問に答えようとし，またそういうことは本当は問題ではないと信じようとして彼らの頭を砕いてきた。

問題は，言葉上の良い定義を見いだすことではない：我々は我々自身を「定義する」 ─他のすべてから我々自身を区別する─ そして，我々の生活の仕方において類として我々自身を意識する。後に誰かがこれを言葉に置き換えたのである。マルクスは，我々自身と残余の動物世界との理論的識別にかかずらわったのではない。問題は，我々自身が相互に対して，また自然に対していかに振る舞っているか，我々は我々の生活の仕方をいかにして変えることが出来るのか，である。どういう行為が，意識的にかつ目的意識的に，相互の関係を形成しなおして，我々が真に全面的な，社会的な，自由な諸個人になることを可能にするのだろうか？

「マルクス主義者」は，間違いなくマルクスが人間の歴史の説明において物質的生産に与えた優先性を非常に強調してきた。『資本論』において，彼らは次のことを読む。

「人間は自然の一つの力として自然的素材に立ち向かう。彼は彼自身の身体に備わった自然的諸能力，手や脚，頭脳や手を，自然の素材を人間自身の欲求に適う形態にして手に入れるために動員する。この動きを通じて，彼は外的自然に働きかけ，それを変化させると同時にに，彼自身の自然を変化させるのである。彼は，自然のうちに眠っていた潜在力を開発し，その諸力の発現を自らの統御の下に置くのである。」[4]

---

[4]『資本論』第1部：283。

彼らが初期の作品に向かうとき，彼らは次のような叙述に全く親近感を覚える。

「人は意識性によって，また宗教その他諸君の好むものによって動物から自らを区別することが出来る。彼ら自身，彼らが自らの生存の諸手段を生産し始めるやいなや動物から自らを区別し始める。彼らの生活諸手段の生産によって，間接的に生活の仕方を生産する。」[5]

さらに，

「自然科学は，産業の媒介を通じて益々実践的に人間生活を占領し，変形してきた。；そして，その直接的結果は人間の非人間化を一層推進する結果にならざるを得なかったにしても，それは人間の解放を準備してきた。**産業**は，人間にとっての自然の，したがって自然科学の，活動的な歴史的関係なのである。産業が人間の本質的諸力の外部への表出と把握されるならば，我々は自然の人間的本質あるいは人間の自然的本質についての理解を獲得することになる。」[6]

＊ここで，訳者は，「man」を「人間」と訳しているが，この点についての著者の註がここに挿入されている。次の通り。

（ついでだが，この章句における「man」という明らかに性別を示す語に異を唱える人があれば，その前に，それはドイツ語の「Mensch」を訳したものであって，「human」つまり**人類**という中性的な語なのだということを想起しておいて貰いたい。なるほど，マルクスは彼が男性と女性との関係の重要性を説明する章句でその語を次のように使っている。「人の人に対する直接的で，自然的で，必要な関係は，**男性［Mann］の女性［Weib］に対する関係**である。」[7]

我々はこの章句にすぐに立ち返るつもりであるが，それは，このことが自然における我々人間の位置に関するマルクスの理解の中心にあるからである。）

マルクスはいつも自然の一部としての人間性ということについて関心を払ってきた。

---

[5]『ドイツ・イデオロギー』，5：31。

[6]『パリ草稿』，3：303。

[7] 3：295-6。

「現実の，身体を持った人間，しっかりと足を地に着けた人間，自然の諸力を取り入れ，発揮する人間…・

人は直接的には**自然的存在**である。自然的存在として，つまり生きて生活する自然的存在として，一方で彼は自然力，生命力を付与されている，― 彼は活動的な自然的存在である。これらの諸力は彼の内部に傾向性，諸能力としてつまり本能として存在する。他方，自然的な，身体的な，感覚的な，対象的な存在として，彼は，動物や植物と同じく**苦痛を受ける**，条件づけられた，制限された生物である。」[8]

すべて我々は自然世界の一部として生活している。我々がいかにその世界をコントロールしようとしても，最終的にはそのあり方から免れることは出来ない。自然的存在として，我々は，我々の自然的素質から生じる欲求を持つ。例えば，年老いて死ぬ，食し，暖をとる，等々。産業と呼ばれる創造と再創造の過程において，人間は，自然を自身の役立ちのために作用させてきた。彼らは成功した，しかしそれはただある点までであって，時には，その結果は彼らが意図したところのものにならないのである。

（私はかつて石炭産業で働いていたときのこと，何千フィートの地下に座り，一人の老人から次のようなことを聞かされたことを思い出す。「決して忘れるな。君の建てた支柱が如何に強くても，いつかはその屋根は床に落ちるということを。それが起きるときにそこに居てはならない！」）

しかしながら，人間の自然への一体性は物語のはじまりであるに過ぎない。：「人間は単に自然的存在であるだけではない：人間は，**人間的な**自然的存在なのである。つまり，人間は彼自身のための存在なのである」[9] 人間の生産は意図的な**目的意識的**なものである。それは，知と意思のみならず想像を孕んでいる。自分達の欲求を充足しようとする懸命の努力において，人間はその現実の行為を媒介せずに現実に存在しないものを創造する。あることをなす前に，我々は我々の望む結果がもたらされることを想像する。自分達が設定した目標達成への過程そのものにおいて，我々はよりよい活動の仕方や新しい目標の達成について考え始める。人間は，彼らの活動において彼らの対自然および

[8] 3：336。
[9] 3：337。

対相互間の関係を絶えず変化させる。彼らは新しい知識と欲求を開発し，彼らを取り巻く世界と彼ら自身を理解する新しい道を見つける。

人間の創造的活動は単に意識的であるだけでなく，**自覚的**なのであって，そしてこのことは，社会においてのみ可能なのである。なぜなら，誰も自分の固有性について自覚することは出来ないのだから。人間は，社会総体の活動を通じてのみ彼ら自身の生活を生産するのであって，彼ら**個々人の**自然との関係は彼らの繋がり合った活動によってのみ決定されるのである。

人間の欲求の充足は，孤立した個人にとっては不可能である。集合的な生産過程（collective production）に参加することによってのみ，つまり，我々みんなが必要とするものをすべての人々と連携して生産する行いによってのみ，個人は真の人間になりうるのである。人間は，あらゆる次元において全自然と関連しており，それがまた人間相互の関連と完全に一体化しているである。人間のあらゆる活動，それがどんなものであれ，それは直ちに自然的かつ意識的であり，個人的かつ社会的なのである。

従って，労働という活動，従ってそこから帰結する対象物は，ただ物質的性格を有するだけでなく，人間社会全体の存在と歴史に属するところの社会的性格を有する。ただそれらの物質的性格を見るだけの経済学，その中には「マルクス主義経済学」を含むが，それはせいぜいのところ人間の平板な像を提示するだけである。

一塊のパン，パン屋の活動，パン焼き装置，これらは単に物質的対象物あるいは物質的過程なのではない。それらは社会的連結の編み目の諸結節なのである：顧客とパン屋・小麦を生産した農民・機械を作った技術者との関係等々。すべてこれらの人々の生活は栄養的，生物学的あるいは機械的な構成によって絡み合っているだけでなく，その人々がそれらについてどう感じ，相互についてどう感じ，自分自身についてどう感じるかによって絡み合っているのである。

人間であるということは，社会的であると同時に特殊な個人，人格であるということである。まさに，マルクスの共産主義の概念は，「自由な発展した諸個人」[10] の可能性に基づいている。人間は社会の外に個人として存在することは出来ない。「人は歴史の過程を経てのみ個人化されるのである。」[11] 個人性（Individuality）は，それ自身人間の総

---

[10]『経済学批判要綱』，29：91。

[11] 同上，28：420。

体的な歴史の歩みの中での人間の活動によって産出されてきたものなのである。

「人はどれほど**特殊な個人**であるせよ（彼をして個人たらしめ，現実の**個人的な**社会的存在たらしめているのは彼のその特殊性であるが），同じ程度に全体性 ── 観念的全体性 ── であり，自らに即して思い浮かべられ，経験されている社会の主体的存在なのである；言うなれば，彼は社会的存在の自覚とその現実的享受として，また，人間の生命発現の全体として，現実世界において存在するのである。」[12]

君は君自身，特殊な人格である。しかし，それは君が世界の中で一つの独自の場を持っているということを意味しているだけに過ぎない：君固有のやり方で特殊な言葉を話し，特殊な食べ物や音楽を好む等々。君を君たらしめているもののどれ一つをとっても，全人類史を通じてして形成されてきた来たものなのだ。

我々は我々が人間的に活動するが故にのみ，またその人間的活動の程度において，我々自身の人間性を意識することが出来る，そしてそれは，我々自身を創造することを意味するのである。我々はある種の機械なのでなく，また，進化する歴史の受動的犠牲者なのでもなく，また決して理解もされなければコントロールもされ得ないところの「本能」によって支配されているわけでもなく，普遍的なコンピュータープログラムにおけるサブルーチンなのでもない。人間性を残余の自然から区別するものは，他のすべての事柄に関して，また互いに関して，また自身に関して持つところの意識的な活動的関係なのである。

勿論，我々は，我々種の発展史から出てくる一定の生物学的形態を有している。しかし，この条件は，我々が集団的にまた個人的に何をするかを固定するものではない。我々の対自然，対相互間の関係は，我々の生産的な活動によって規定されてくるのである。つまり我々が行うところのもの，それが我々なのである。

「動物はその生命活動と直接的に一体である…人間はその生命活動それ自身を彼の意志と意識の支配の下で行う。彼は意識的な生命活動を持つ。意識的な生命活動こそが人間を動物の生命活動から区別するのである。」[13]

---

[12] 3：299。

[13] 3：276。

どんな人間も，社会学者や心理学者がを好んで言うように，はじめは他のすべての人から分離して存在し，後に「社会によって形成される」とか社会的環境によって影響されるというような，孤立した存在であるような個人というような存在なのではない。それぞれの人間は，－潜在的に－「社会的な個人」「普遍的な個人」なのである。彼および彼女をして真の人間たらしめるところの創造的な諸力，マルクスが「生産諸力」と呼んだものは，即全社会的であり，即全個人的なのである。マルクスは，一つの説明として彼の仕事を取り上げている。

「私が科学的な活動をしている時など ── それは他の人との直接的共同では行うことが滅多に出来ないような活動であるが ── 私がそれを一人の人間として行っているが故に私の活動は社会的なのである。私の活動の素材が私にとって社会的な生産物として与えられているだけでなく，私自身の存在が社会的活動なのであり，従ってそれが私自身を造り，社会のための私，社会的存在としての自身についての意識を備えた私を作るのである。」[14]

我々がなすことはどれも，我々固有の仕事であり，表現であると共に，社会全体の表出でもある。

「人はその総体的な本質を総体的なありようで，つまり全体的人間として持っている。世界に対する彼の人間としての関係のそれぞれ－視る，聴く，味わう，感じる，思考する，観察する，経験する，欲する，活動する，愛すること－は，つまりこれら個人的存在の全器官は，その形態において直接的に社会的である諸器官と同じように，対象的適応，つまり対象へのそれらの適応，対象の獲得行為（appropriation），人間の現実性の獲得行為を行っているのである。」[15]

人間個人は，自由で，自己を創造するものであるが，彼および彼女としての具体的存在においてのみ真に社会的存在なのである。しかしながら，この真の存在は，マルクス

[14] 3：298。
[15] 3：300。

が「人間的社会の観点あるいは社会化された人間性の観点」[16]と呼ぶところの特殊な角度からのみ把握されうるのである。そして，本当のところは，それは我々の生活あり方によって隠され，歪められているのである。

そういうわけであるから，過去数千年間，特に過去数世紀の間に獲得されて来た生活形態は，ある観点においてのみ人間的なのである。真のつまり「社会化された」人間性の観点を採るという作業が，生活を覆う外見や様式に対抗して，異端視され，偏見にさらされつつ果たされうるのみの困難な仕事である理由はそこにあるのである。今の時代のほとんどの人々の世界を見る観点は，大体において「市民社会における単なる個人」[17]のそれである。私的所有，貨幣，国家によって支配されて，人々は自身を社会的断片として見，社会を敵対的な，疎遠な機構・他人からなる機構として見ているのである。

(2) 非人間的な形態における人間性

(a) 疎遠な世界

我々の生活している人間生活の社会形態は，人々を互いに敵対させている。社会全体は我々各人を敵として立ち向かわせている。人々と人々の自然に対する関係の全過程は，隠蔽され，歪められ，神秘化されている。めいめいの個々の人間と彼らが生活する社会との関係は，哲学者や心理学者，政治学者によってとくと考えられて来た大問題である。実際，哲学の存在そのものは，人々が自分が何者であるかを知らないということを示している：もし彼らがそれを知っていれば見つけ出そうとする欲求はないであろう。

もし過去数千年間にわたって我々人類の歴史を振り返ってみれば，とくに今日の我々の生活を振り返ってみれば，私が示してきた人間性についての描写は，全くピッタリこないようにみえる。諸個人の生活は自己創造的であることからほど遠い。彼らは彼らが理解できない諸力によって支配されており，そのコントロールに委ねられている。彼らの考えは外側から彼らに与えられるような形態を採っている。社会と自然は，神秘的な・疎遠な・敵対的な力として彼らに立ち向かっている。人々 ── 少なくともこの時代のほとんどの人々 ── は，自分達自身を闇雲に互いにぶつかり合う連関なき断片として見て

---

[16] フォイエルバッハ第10テーゼ，5：5。

[17] フォイエルバッハ第9テーゼ，5：5。

いる。**我々の生活のあり方が，我々が現にあるところの存在を否定しているのである(The way we live denies what we are)**。

マルクスは，何が人間的であるかについての概念を持っていたので，何が非人間的かについて問うことが出来たのである。マルクスは，近代社会を人間的なものが非人間的なものの中に埋め込まれるという脈略において理解しようとした。　彼はしばしば人間的内実を包みこんでいる非人間的形態を描写するのに覆いとか殻とか外皮という隠喩を用いた。[18] これらの形態からの解放は，真実がその内部に閉じこめられているところのこの包皮をはぎ取ることを意味する。

この「外皮」という言葉は，生物学者によって一つの組織の周りをを取り巻くものを意味するものとして使われている。それは，その中に後から核が挿入されるような別個の製造容器のようなものではない。それらはもともと一体のものであり，相互関係においてのみ発展してきたものであった。　彼らの一体性と彼らの分離は共にそれぞれの本質に属することであり，過去の全歴史を通じて準備されて来たものなのである。人間のみが非人間的であり得るのである。(人は非人間的猫を持つことは出来ない)

人間性はこれまで非人間的生活の形態の内部で自らを潜勢的に創造してきた。個人と社会および社会と意識との連関，活動の目的と結果との連関は，破られ，倒錯されて，書かれた歴史を貫通してきた。このゲームの最後の段階で，疑いもなく自然に対する人類の関係が完全に行き詰まって来た。

例えば，言語能力をとりあげよう。それは人間であることの一重要側面である：それは，我々のめいめいが，何が他の誰かであることの特徴となっているのかについて少なくともある種の知識を持つ能力である。それがなければ言語は不可能であろう。我々は何かを言うことが出来る前に，それについて考えることさえしないで，次のことを分かっているに違いない。つまり，人は君のたてる音を聞いてそれによって何かを理解するだろうということを。

この能力がいかにして他のものに転化しまったかを見てみよう。今日他の人々が言語能力から作る知恵は，主として，どのようにすれば彼らを騙し，彼らが欲していないことをさせるかを知る基礎となっている。(ここには私が以前に言及した「非人格的技能」

---

[18] 2～3の例が以下にある。『資本論』第1部：92, 103, 166, 929 (32章)。

がある。それらは「宣伝」として，平明な言葉で「ウソをつくこと」として知られているものである。）ここでは「言葉は，ひとをして彼らの考えていることを隠すことを可能にするために人に与えられたものなり」である。

私が以前に引用した女性と男性との関係についての章句を続けよう。

「人間の他の人間に対する直接的で自然で不可欠な関係は，**男性の女性に対する関係**である。この自然の種関係においては，人の自然に対する関係が直接的に人に対する関係になっているが，それはまさに人に対する関係が直接的に自然に対する関係になっていることでもある—人間固有の自然的規定性。したがって，この関係においては，人間的本質が人間にとって自然になっている度合い，あるいは自然が人間の人間的本質になっている度合いが，感覚的に表出し，目に見える事実になっているのである。この関係は，人の欲求が人間的欲求になっている度合い，従ってまた，一人格としての他人が彼のための欲求となっている度合い —— その個人的な存在において同時に社会的存在である度合い —— を表出しているのである。」[19]

この注目すべき叙述は，私が着目してきた人間的なあり方の諸特徴のすべてを一体的に語っている。性的関係は，疑いもなく自然的であり，それは人間生活の生物的性格に属しているが，同時にそれは社会的しきたりによって管理されている。それはどんなものにもなりうる個人的なことであるが，未だにあらゆる種類の社会的，政治的，経済的諸力によって形作られ，また奇形化されている。同時にそれは「本能的」で，かつ意識的な・自覚的な決定の産物である。

それが，この最も自由で最も人間的領域が社会生活のある種の最も非人間的局面の場となっている理由である。かくあるが故に，マルクスは，それを人間が人間的な社会的存在に向かって進歩してきた度合いを測る尺度にすることが出来るのである。私はここで，単に男性の女性に対する圧迫や彼らの財産持ち分に対して注意を向けているだけではない。彼らが圧迫する女性に関してと同様，男性の人間性をも隠蔽し，毒し，倒錯さ

---

[19] 3：295-6。

せるところの全体としての人間生活の非人間的あり方を指しているのである。

(b) 我々自身からの疎外

21世紀の終わりにおいて，世界が「諸個人の自由な発展」の場というようなものからほど遠いものであることを理解することはあまりに容易い。近代世界では，すべてのものが本質的に人間的であるものを否定し，転倒させている。社会的諸関係が人間の創造的諸力の発展を台無しにし，あらゆる点でそれに衝突している。この力が増大すればするほど我々の生活は不自由になり，それは制限され，毒される。

我々は，「社会化された人間」の観点から世界を見ないで，抽象的な社会的関係や諸力によって立ちはだかられている孤立化した諸個人，人間性の一面的化された断片としてそれを見ているのである。これらの諸関係は，人間の織りなす産物であると共に人間のコントロールを超えている。

我々は我々が何者であるのか知らないし，我々が何になりうるのかを考えることも今はほとんど止めてしまっている。今日，我々の相互の関係は，我々にとってマルクスの時代におけるよりも遙かに疎遠になっている。原子化された社会において，個々人は未知というだけでなく，相互に対して，自然に対して，自分達自身に対して敵対的である。増大する技術の発展によって百倍にもなった人間的創造力が，その創造者に対して盲目的に敵対し，今では自己破壊的な力になっている。

マルクスは，こうした事態を「より良い世界」のために彼が考案した青写真に反するものと考えたのではなかった。彼はまた，我々が生活しているやり方が我々のありようとして免れ得ないものという観点も取らなかったであろう。空想主義者の夢想とか皮肉な現実受容とかを拒否して，彼は，我々がその本質的自然から「疎外」されたあり方で生活しているのだという考えを打ち出したのである。

マルクスは，近代における人間生活の非人間的形態を通してのみ，人間の本質的自然についての見地に達したのである。彼は，社会生活の諸形態が男と女の集合によって意識的に決定されるものではないことを理解した。我々は諸社会形態を創るが，それらは我々にのしかかってくるようになり，「第二の自然」のように，外的な力のように我々に立ち向かってくるのである。

対象化されたものは諸個人の所有物となり，その形態において彼らの生活を支配する

ことになる。人間は－他に誰が？－政治的制度，国家を設置し，作用させる，そしてそれが彼らが従わなければならない力となる。それが個々の人間を規制し，時には破壊するのである。これらの敵対的な諸形態は，その内部で生き残っている人間の本質的に社会的な性質を除去するわけではないが，それを認識できないように歪めるのである。問題は，この人間的内実を掴み，それがその内部で成長してくるところの非人間的外皮をうち破る可能性を理解することである。

我々はマルクスが人間存在をどのように見ていたかを理解してきた：それは，自己創造的な，自覚的な，自然の社会的部分だということであった。しかし，この概念は彼の考えの中心にあるものであるが，彼の出発点ではあり得ない。ここで私が言いたいのは，彼の研究は現に我々が生活しているそのあり方から始まらねばならなかったということである。そうでなければ，彼は，不幸なあり方で現にある社会状態に対して，世界が如何にあるべきかの意見を対置するところの単なる空想主義夢想家にすぎなかったであろう。

マルクスは空想主義者達を高く評価した。フーエリエとかロバート・オーエンのような人々は社会主義についての多くの考えを考案する責を果たした。彼らは彼らの考えを，社会が如何に**あるべきか**についての設計図として提出した。彼らはこれらの計画・「科学的」作業の産物が，なにほどかの人間理性を表出していることで満足した。しかし，この中で彼らは，人間性を，理性的な諸個人の集合として考えるという考えを受け入れていたのであるが，彼らは現存社会秩序を支持する人々からそんなに遠く隔たった位置にあるものではなかった。こうして彼らは，彼らがあたかも社会の外側に立っているかのようにして社会を見たのであった。

マルクスは，空想主義者達から彼らの共産主義に関する多くの概念を得たが，共産主義とは何かについての彼らの基本的認識を拒絶した。

「共産主義とは，うち立てられるべき**一定の事態**，現実がそれに合致させられなければならない理想なのではない。我々は共産主義を物事の現在の状態を廃棄する現実の運動と呼ぶ。この運動の諸条件は，今日存在する諸前提から出てくるものである。」[20]

---

[20] 『ドイツ・イデオロギー』，5：36。

空想主義者達は解決しがたい逆説に囚われていた。彼らは彼らの自身の発想がどこから出てくるのか説明できなかった。結局，彼らが如何に善意の人であったっとしても，彼等は，不可避的に彼等自身を普通の大衆の上に立つことの出来るある特殊の存在として見ていたのであった。

「環境とか教育に関する唯物論者の教義は，環境を変えるのが人間であり，教育者自身教育を必要としているということを忘れている。従って，この教義は必然的に社会を二つに分けるに至る，その一つが社会に優位するものなのだ（例えばロバート・オーエンにおけるように）。環境の変化と人間の活動の変化あるいは自己変化との合致は**革命的実践**としてのみうち立てられ，それによって合理的に理解されうるのである。」[21]

「マルクス主義」の慣習における多くの混乱は，これが何を意味するかを考えることを拒否したことから生じている。「前衛の指導性」という「外側から社会主義的意識を労働者階級に持ち込む」考えなどはまさにその結果である。何人も強制されて自由になり，追い立てられて人間になるというようなことは出来ることではないということを，我々は今日よく知っているし，以前にも知っていたはずである。そうでない考えをするということは，人間であるということが何を意味するかについて歪んだ認識を持っているということである。

ますます私的利害で動くようになっている社会において，人はいかにして「社会化された人間の観点」を身につけることが出来るか？ 近代世界の全衝突と分裂の真っ直中にあっても，とにかく，我々は――大した程度ではく，何時もでもなく，また我々自身にとって理解されているわけではなく，また多くの間違いや歪曲を伴いつつであるが――人間的であり続けてきた。我々は気が付かないでそれを知っている。

そういうことがなかったら，言語も，科学も，哲学も，政治も，詩も，愛も存在しえないだろう。これらの活動が――彼等が置かれている非人間的外皮の中で歪められ，転倒され，複雑にされつつ――存在し続けているのである。そのことが，次のことを我々

---

[21]『ドイツ・イデオロギー』，5：36。

に語るのである。つまり，人間性は確かに生きているのであるが，その正反対物と共に，それによって隠されて，かつ同時にこの人間性についてのメッセージを我々に与えかつそれを否定する形態で，生きているのだということ。

かくして，「マルクス主義者」や「弁証法的唯物論者」の驚くことに，マルクスの問題は個人の意識についての問いに中心を移すことになるのである。

「意識（das Bebstsein）とは，意識的存在（'das bewstste Sein）以外の何物でもあり得ない，人間の存在とは彼等の意識的生活過程なのである。もしすべてのイデオロギーにおいて人間と人間の諸関係とが，カメラの暗室におけるようにさかさまに現象するならば，この現象は彼等の歴史的な生活過程から生じているのではあるが，それは丁度網膜の上に映る対象物の転倒が物理的な生活過程から生ずるのと同じことなのである。」[22]

意識的な役割遂行意識のないところではどんな人間的活動も人間的関係もあり得ない。我々が非人間的な生活を続けているという事実は，この非人間性を何か「自然な」そして免れがたいものに思わせているあり方によって我々が世界を見ているということを示している。生活の非人間的形態は，こうした意識形態の内に取り込まれる場合以外には見えるものではないのである。

マルクスは社会学者でもなく，経済学者でもなかったし，もし科学ということによって我々が何かに論理的な説明を与えることを意味するならば，社会科学者でもなく，なんらかの政治科学者でもなかった。なぜならば，彼は，彼が把握しようとした世界は論理的なものではないことを重々知っていたからである。彼はこの混沌とした世界についてエレガントで滑らかに働くモデルを創ろうとする企図は，非論理的な夢，非合理的な事柄を合理的なものにしようとする試み以外の何物でもないと見なした。

これが，どういう姿勢で彼が政治経済学の存在そのものを研究の分野と判定したのかをしめしている。政治経済学とは，自分自身を見る虚偽のあり方の表現，そして，それを通じての生活の虚偽の —— 非人間的な —— あり方の表現なのであった。だから，彼はそのような非合理的なものについての抽象的な「モデル」を造ることなどしようとしなかったのである。非人間的性格をある種の科学的な包装紙で包んで消し去るこの種の試

---

[22]『ドイツ・イデオロギー』，5：36。

みが，それ自体この転倒した生活のあり方の症状のなのである。逆に，「科学」の仕事は，如何にしてそのイデオロギー的覆いををはぎ取り，非人間性を暴露するかということにあるのであった。彼の生涯の仕事の大部分が「政治経済学の批判」作業に捧げられた理由はそこにあったのである。

(c)　マルクスと経済学

不幸にも経済学の教科書を開かざるをえない人は誰でもグラフや数学で粉飾された技術的専門用語の山に遭遇せざるを得ない。明らかに，この経済という代物は，普通の人にはとても理解出来ないひどく混み入った一つの機構であり，そしてその研究は高度に科学的なのである。この複雑な装置が表示されるあり様を刮目して見て，経済学を学ぶ学生は，彼等が神秘的な技法の中に誘われるのを知るのである。これは何故なのか？ 主題は普通の人々が殆ど毎日の生活で行っていることに関するものではないのか？ この謎はどこからくるのか？

経済学を始めることは洗脳の過程である。初心者は，彼等がそのコースを完了し，試験をパスするつもりなら，確定した答のみが妥当なのだということを教えられるのである。他の諸疑問は，如何にそれが当然生じてくるものであっても断固として抑制されなければならない。(勿論，制度化された学習の場では，すべての科目において同じことがいえるが。経済学はその点で際だった例にすぎない。)

初級経済学教科書は，「経済学は，社会が何を，如何にして，誰のために生産するのかの勉強である」(これはよく普及している教科書にあるのを見つけたものである）というような有益そうにに見える叙述から始めることを好む。しかし，それは，それが答える以上の疑問を引き起こす。この勉強は，一つの教科書ではなく，カバーすべきシラバスを持たず，最後に試験もない以上，容認できない事柄について訊ねるのは自由である。ここで私は次のようなことを言っているのではない。つまり，何故，一方で多くのの人々が彼等の子供達が飢えで死ぬかも知れないでいる時に，世界の中のある人々が飽食を大変心配しているのか？何故，ある人々は，ある家族がその全生涯で費やすより多くのカネを一日で手に入れるのか？ 造ることが出来るものが不足している時に人々が何故失業するのか？

こうした疑問に心を砕かないで，親切な寛大さでそれらに対応する左翼経済学者もい

る。しかし，他の種類の疑問はより一層歓迎されない。「社会が決定する」とはどういう意味か？（そして，一体「社会」とは何か？）何故人々は，互いに諸物をそれを必要とする人に与えることをしないで売るということをするのか？何故人間の労働によって生産された富の殆どが，それを生産した人ではない人に属する私的所有という形態をとるのか？ すべての経済的事象は人間の活動の実例なのに，何故我々はそれを説明するのに職業的助けが必要なのか？

彼等の全研究がその上に築かれている諸前提が所与のものとすれば，経済学者がそのような質問に耐えられるはずがないことは全く当然である。（最後の質問が彼等を不愉快にするのは驚くに当たらない。）彼等は一セットの経済諸関係のモデルを造ることにかかずらわる。彼等がスタートする前に，彼等は彼等が「モデルリング」する世界が特定のあり方で運行していることを当然のこととして認めてしまっているのである。彼等は，自分達が人間の間の関係と人間の諸活動について語っていることを忘れているように見える。 彼等はそれを理解しないため，その結果，人間とはどのようなものかについての特定の見方に立ってしまっているのである。たとえば，彼等は，人それぞれの「経済活動」というものは，他の誰のためよりも，彼・彼女自身の状態をより良くしようとするための行為だということを，疑い無しに前提しているのである。

カール・マルクスはこれらを低く評価し，それを「俗流」と評した。

「人々の諸関係の外側をただうろつき周り，科学的な経済学によって与えられて以来それらの材料について反芻し，ブルジョアジーの居心地の良い目的のためにありのままの現実をまことしやかに説明することを追求するだけである。これとは別に，俗流経済学者たちは，彼等にとって最良のものであるブルジョア的生産活動によって支持される彼等固有の世界について，陳腐な独りよがりの概念を衒学的なやり方で体系化し，永続的な真理としてそれを宣言することに自己の役目を限定する。」[23]

俗流経済学者達の陳腐さと独善は，この社会形態の基本的諸前提を無批判的に表明しているだけではない。

---

[23]『資本論』第１部：175。

マルクスはこれらの人々を，彼等の先行者つまり1830年頃消えてなくなったと彼が考えた「古典派経済学者」からきっぱりと区別した。それにはアダム・スミスやディヴィッド・リカードをはじめ，「ウィリアム・ペティの時代以来ブルジョア的生産諸関係の内的関連を研究してきたすべての経済学者達」[24]がふくまれていた。彼は，彼がこれらの人々の結論に如何に不賛成であろうともこれらの人たちは真の科学者であったと信じた。彼は40年を，「経済学批判」の作業，その主題に関する歴史についての長い検討を含むところの「経済学批判」の作業に費やし，そしてそれを完了することもなかったのである。

「マルクス主義者」の慣習では，彼はより良い経済学つまり「マルクス主義」／社会主義経済学を打ち出そうと試みたとされていた。私は，これは全くの間違いだと考える。なぜならマルクスの「批判」は，一セットの見解が誤りだと言うことをしめすとか，他のセットをそれに置き換えるとか言うことでは決してなかったのである。彼が関心を示したのは，「資本主義」と呼ばれる機構的システムの運行について経済学者達が到達する諸結論についてのはっきりとした拒否であった。彼は，彼等の仕事が本当は如何になされれべきかを示すことによってこれを徹底させようとしたのでもなかった。（ついでだが，「資本主義」という言葉はマルクスによって殆ど使われたことのない言葉である。）

マルクスは偉大な古典派経済学者の仕事を，彼等がそれを「人間的自然」の現れと信じたところの近代世界の社会的諸関係を研究したものとして見なした。（マルクスがヘーゲルの考えを視野に納めたあり方との類似がここにはあるが，それについては第4章の補論で概説する）。マルクスの経済学批判は，近代の社会諸関係とその交替のための基本的な必要条件を理解するための彼の方法であったのである。

彼が果たそうと欲したことは，ブルジョア的思考の最も高度に発展した成果の中に，その非人間性が自然な状態として現れる社会的諸関係の多様な形態の首尾一貫性を追跡することであった。俗流経済学者はこの目的のために役立たなかった：そこから得られるものはその空虚さへの驚きのみである。

しかし，スミスやリカードやジェイムス・ミルは大変役立つものだった。彼等の後続者と違って，彼等は彼等の生きた時代のヨーロッパにおいて展開していた巨大な社会的，経済的発展についての客観的な説明を見つけようと努力していた。マルクスにとって彼

---

[24]『資本論』第1部：174-5。

等が重要だったのは，彼等が「私的所有の諸法則」を展開しようとした時，彼等は本質的に**非合理的**な，転倒したた事態を**合理的に**説明しようとしたことであった。

その最大の発見は市場における諸商品の価格間の量的関係にとっての労働の重要性であった。マルクスはこれが何を意味するかを示している。それは，諸財貨の所有者の生活は，人間労働によって生産された諸財貨，諸対象の関係によって支配されているということを含意しているのである。それらに対象化された労働はかくして「社会の集合的労働」に連関するのである。

経済学者は諸個人の関係が何故この特殊な形態をとっているのかを決して問うことはできなかった。だから，経済生活の科学的説明を与えようとする彼等の試みは不可避的に矛盾に陥る。しかし，それがまさにマルクスにとって彼等が重要であった理由なのである。なぜならその論理的矛盾は**現実の**生活上の矛盾の症状であったからである。諸商品と貨幣の交換に支配された生活形態は全く crazy (verruckte)[25]だからである。

「ブルジョア経済学のカテゴリーはまさにこれらの諸形態からなりたっている。それらは，社会的生産のこの様式に属する生産諸関係に対して妥当するところの，従っその意味で客観的な思考形態なのである」[26]

「妥当する」－gultig－という語は，面白い。それは，鉄道チケットとか銀行券とかが受け取られうるだろうという意味で使われている。これらは諸君が現存する社会秩序に入るならば従わなければならない諸形態なのである。しかし，それは**本質的に奇怪な**(**mad**) 構成なのである。

「これらの定式，生産過程が人を支配する社会形態に属することを刻印されたこれらの定式は，経済学者のブルジョア的意識には，逆さまにではなく，生産的労働それ自体と丁度同じように自明の，自然が付与するる必然として現れるのである。」[27]

---

[25]『資本論』第１部：169ページは，この語を 'absurd' として翻訳

[26]『資本論』第１部：169。

[27]『資本論』第１部：174-5。

まさに彼等がブルジョア社会の諸関係の奇怪な世界を合理的，科学的に説明しようするが故に，かれらはこれらの諸関係と真の人間性の本質との間の矛盾を正確に指し示すことになるのであった。そういう次第で，彼等の仕事の批判は，狂気（insanity）が「自然」に見えるようになる過程の内部に我々を連れて行くことが出来るのである。

「人間生活の諸形態に関する考察は，従ってそれら諸形態の科学的分析は，その現実的発展に対して正反対のコースをとる。考察は**事後に**，従って発展過程の諸結果が手に入る状態で始まるのである。」[28]

マルクスは，貨幣が「作用する」仕方を説明すること，貨幣が何であるかを見つけること，この諸個人の間の媒介物が彼等の生活を如何に支配するかを説明すること，そのことを業としたのではなかった。貨幣，孤立した人間生活のグローバルな継ぎ輪，が同時に如何にして彼等を取り囲む有刺鉄条網になるのか？

「互いに無関心な諸個人の抽象的な相互依存，これが彼等の連関をなすのである…各個人が他人の活動や社会的富に対して発揮する力は，**交換価値**，**貨幣**の所有者としての彼の内に存在する。彼は，彼の社会的な力，社会との繋がりとしてのそれ，をポケットの中に持ち運ぶのである。」[29]

このようにして，マルクスの経済学批判つまり彼等がどこに導くかを注意深く追跡しつつその諸前提に対して拒否する作業は，近代社会の諸問題の核心に達するのである。商品形態から貨幣形態を導くこの転倒の「論理」の跡づけの中で，『資本論』第1章は，人間の間の関係が如何に物の間の関係の形態を取るかを示している。

「私的個人の労働は，交換の行為が生産物の間に達成する関係，そしてその仲介を通じて生産者の間に達成する関係を媒介としてのみ，総社会的労働の一要素として自己を証明する。したがって，生産者にとって，彼等の社会的関係はあるがままに，つまり彼等の労働における直接的に社会的な関係としてでなく，人々の間の物的関係として，物

[28] 『資本論』第1部：168。
[29] 『経済学批判要綱』，28：94。

の間の社会的関係として現れる。」[30]

経済学 ── 俗流経済学は度外視するとして ── は，交換行為を当たり前のことと見なした。**Adam Smith** が人間の「自然的性向」と呼んだものをマルクスは本質的に非人間的と見なした。彼が1843年の終わりにその研究を始めた時から，この活動が近代生活の非情性の核心だということを了解していた。だから，1844年の早い時期のミルノートにおいて，彼は人間性とその非人間的外皮との間の対照を示したのである。

「**交換あるいは取引**は，私的所有制の枠内での社会的な行為，類的行為，社会的交通であって，したがって外的な，疎外された類的活動なのである。この理由で…・社会的関係の反対物なのである」[31]

交換関係は「反社会的な社会的」関係なのであり，それほどに奇怪な（mad）ものなのである。

「一人の人間として君は，勿論，私の生産物に対して人間的関係を持つ：つまり，君は私の生産物について**欲求**をもつ。それは君の欲望と意欲の対象として君のために存在する。しかし，君の欲求，君の欲望，君の意欲は私の生産物に関しては無力である…［それは］むしろ君を私に依存させる紐，…私に君を支配する力を与える手段を構成する。[32] 我々の対象物のそれぞれの力についての我々相互の認識は，しかしながら，一つの闘争である，…物理的な力が使用できないならば，我々はそれぞれにはったりをかますように試み，より巧妙な騙しを試みることになる。」[33]

これは「若いマルクス」（25才）のものだった。しかし，彼はその2倍の年になって，『資本論』第2章「交換過程」を書いた時，彼のメッセージは全く同じだった。

「これらの対象物が商品として相互の関係に入り得るためには，それらの保護者（彼等の所有者）が，一方の意志が他方の意志であり，意志の共通行為によって，互いに別の商品を手に入れ，彼の所有の商品を手放すというやり方で，彼等自身が相互関係に入らなければならない。…この法的な関係の内実は，それ自体経済的関係によって規定さ

[30]『資本論』第1部：165-6。
[31] 3：221。
[32] 3：225。
[33] 3：226。

れている。ここでは人格は諸商品の代理者したがって所有者としてのみ存在するのである。」[34]

（ついでだが，この一文はヘーゲルの「精神現象学」[35] における一文への直接の熟考された言及であり，ヘーゲルでは，マルクスの場合の二人の商品所有者の代わりに二つの「自己意識」が置かれている）

マルクスは二つの反対の形態を対照している。労働の生産物を交換することはなるほど最も人間的な活動：それは我々の共有する生活における協同のあり方である。しかし，**私的所有物**を交換する活動は**非人間的**関係となる。『資本論』第2章の終わりで貨幣の起源を論じて，マルクスは次のように言う。

「社会的生産過程における純粋に原子的な振る舞いと彼等自身の生産諸関係によってもたらされた客観的形態は，ここでは彼等の支配と彼等の意識から独立して現出する：つまり生産物は商品という形態をとる。」[36]

この枠組みの中で，マルクスは，近代社会の非人間性についての合理的で「科学的な」説明を与えている経済学者の中の最も客観的な者でさえ，その本質的な奇怪さ（madness）に気づくことに失敗していることを跡付けているのである。

「マルクス主義者」の神話は，マルクスが労働価値説を支持して，スミス，リカードウから取り出して少し精緻にしたという確信に関連している。確かに「労働」── 生産の活動 ── と「労働力」── 資本家に賃金によって購買される労働の能力 ── とを区別することによってマルクスは利潤，利子，地代等の形態をとる剰余価値の起源を明らかにし，自由な賃金労働が「賃金奴隷制」だということを示した。

これは「マルクス主義者」の信じたように，ある別種の経済学なのか？ 全く違う。マルクスにとって重要だったのは，経済学が乗り上げた論理的な矛盾の暗礁であったのであり，それは間違った議論によってもたらされたのではなく，原理的に現存社会秩序を乗り越える能力の欠如によってもたらされたものなのである。マルクスは，彼がリカー

---

[34]『資本論』第1部：178-9，再翻訳されたもの。

[35] T. m. Knox and A. V. Miller の訳（Oxford University Prress, 1977.）

[36]『資本論』第1部：187，部分的に再翻訳

ドウの体系に見いだした理論的不一致を歓迎したのだが，それはブルジョア社会の現実の諸矛盾を正直に表現しているものだったからである。これら諸矛盾のそれぞれは，人間性とその非人間的社会形態との衝突の産物なのである。それは，リカードウの目にとってさえ見えなかったものであった。

マルクスが貨幣関係の性格を説明するとき，彼はそれが，如何に必然的に資本に，つまり賃金労働者とその家族の人間性を破壊するところの社会的力に，転化するのものであるかを示すのである。自由と平等の関係という外見から始まったものが搾取と抑圧として立ち現れる。

マルクスの本は，この非人間的社会関係たる資本が，如何に自己を生産し，再生産するか，そして，その活動と意識形態が，まさに資本の維持に結果している人間を如何に隷属させるのか，についてのものなのである。叙述の各段階において，彼はこの運動形態とその形態の内で生活する人々の目にそれが映るるところの，歪曲され，物神化されたその現れ方を同時に描いている。これが，彼が資本に対する労働の闘争の意味を見いだす仕方なのである。

タイトルページにマルクスは，彼の主題は「資本：経済学批判　第Ⅰ部：資本の生産過程」であると宣言した。それは英語版第１版でいわれているように「資本：資本家的生産の批判的分析」ではない。このわずかな違いの意味は大変大きい：マルクスは，「資本家的生産システム」において如何に財貨が生産されるのかを描こうとしたのではない。

そのポイントは，労働者が工場に働きに行く度に彼女が生産するものは使用される品々でもなく，貨幣と交換される価値でもないということである。それは再生産され続ける資本関係，つまり当該労働者自身を含めて，工場所有者の所有物として留まる生産の諸条件から労働者達を分離する関係，これである。彼女自身の活動は彼女にとって疎遠な或るものに結果するのである。

マルクスが一度ならず宣言したように，説明されなければならないのは，これらの要素が生産を可能にするために合体されてきたその合体の仕方の歴史ではなく，それらがどのようにして初めて分離され，その分離がどのように再生産されるのかである。それが，労働者をして賃金労働者の地位を受け入れさせているところのものであり，彼女を家から工場へ引き連れて行き，彼女にとって全く関心のない何かあるものを生産するた

めに彼女の生命活動を発揮することを強制するところのものなのである。

「説明を必要とするのは，生活し活動する人間と彼等が行う自然との質料交換における自然的非有機的条件との統一ではなく，したがってまた彼等の自然の取得でもない。勿論，この統一は歴史的過程の結果ではない。我々が説明しなければならないのは，これらの人間存在とその活動の非有機的諸条件との分離，賃金労働と資本との関係においてのみ完全な形態になる分離，なのである。」[37]

理解されなければならないことは，単なる人間の創造的能力でなく，ブルジョア社会において歪められているその非人間的形態なのである。これは economics ではなく，political economy でもない。それは実に正反対のもの：経済学の仕事を解体する試みである。経済学がなぜ諸物がそれらが現にあるようにあるのかの必然性を説明しようとしている時に，マルクスはそれらを異なったものに変える可能性と必要性を示そうとしているのである。

マルクスは偉大な古典派経済学者によってもたらされた理解の前進を認めた。しかし彼等の理論――例えば，価値と労働との関係――は，彼のものではなかった。彼等が価値を説明しようとしているところで，マルクスは，この関係がその独特の形態をとるのはなぜか，それが我々の生活の上にどのように力をふるうのか，を知ることを求めていたのである。

「経済学は…一度としてこの内容がその独特の形態をとるわけ，つまり，なぜ労働が価値において表現されるのか，労働の継続時間の量がなぜ生産物の価値において表現されるのか，を訊ねたことがない。」[38]

彼が価値の形態の発展を論じる2～3ページ前で，彼は彼の仕事が「貨幣の起源（発生史）を示すこと」[39] にあると述べている。他方，経済学の教授は，彼等が彼等の生徒に教えなければならないことは，すべての人が「貨幣が何であるか」を知っている以上，

---

[37]『経済学批判要綱』，28：413

[38]『資本論』第1部：174。

[39]『資本論』第1部：139。

「貨幣が如何に機能するか」にあると考えているのである。

資本家の受け取るものと支出するものとの量的差異として現れる剰余価値は，勿論重要である。しかしマルクスにとって本当に重要だったことは，一人の人間が彼または彼女自身の生命活動を貨幣のために売り払うということの本質的な非人間性であった。賃金関係は，人間があたかも物，彼等自身に帰属するのでない資本の自己拡大の手段，であるかのように取り扱われるということを意味している。

労働者と彼の家族が追い込まれている生活標準，そして彼等の生活と労働の諸条件は，彼等が彼等自身の生命活動つまり自分自身に関わるこの非人間的な，疎外された関係の表現なのである。かくして，価値－貨幣形態に見られる「奇怪性（madness）」はより高度のレヴェルに回帰する。資本の形態は，労働者の人間的存在と社会的に創造する能力に属するその特徴そのものを支配し，転倒させる。マルクスがここで強調しているのは，単に労働者の生産する能力が他の誰か，資本家あるいは経営者，によって支配されるということではない。彼が明らかかにしようとしたことは，この人間的力が，非人格的な社会的な力である資本の形態で現れるということであるのであって，資本家は単にその「人格化」にすぎないのである。

それは特定の誰かによって支配されているのではない。事実それはすべての人を支配しているのである。だから，労働者が彼等の労働条件の改善を勝ち取るために団結するとき，直接的な問題が如何に現世的なものであっても，彼等は，潜勢的には彼等を非人間的にする資本の力に対して，彼等の人間性を求めて闘っているのである。問題はこうである：如何にこれを**顕勢化**するか。

「かくして，集団的な労働，社会的労働としてのその性格，それは資本の集合的力である。科学やと分業も同じである。分業は，この場合雇用主の分業よび彼等に属する交換として現れるのである。社会的生産力はすべて資本の生産力であり，したがって，それらの主体は資本なのである。

工場において現れる労働者の協働は，彼等によって差配されるのではなく，資本によって差配される。彼等の結合は，彼等の存在ではなく，資本の存在なのである。個々の労働者にとってはこの結合は偶然である。彼は，他の労働者との彼自身の協働に対して，彼等との協力に対して，**疎遠なもの**として関係する。それは，資本の活動様式への関係

になっているからである。」[40]

どうして人々が生産する財貨が，ただの無生物たる対象物が，人々の生活を支配出来るのか，どうして死んだ労働が生きた労働を支配できるのか？それは，この対象物が単なる物質的な物ではなく，社会的な存在であるからである。それが置かれている場は，死んだ社会的なものが生きている人々を支配する力を持つ世界なのである。 それらの生産者が関係しあうのは，商品としての死んだ社会的労働の間の関係を通じてのみなのである。マルクスは，人間の創造物たる生産物が生産者を支配するこの転倒を，宗教世界と対比して「商品の物神崇拝」として示している。金が「生まれながらに」貨幣であるかのように，労働が「生まれながらに」賃労働であるかのように，機械が「生まれながらに」資本であるかのように現れるのである。

マルクスが資本を論じる時，この物神崇拝が如何に益々高いレヴェルに高まることになるかを示すのである。資本，彼がこの本をそれにちなんでそう名付けたこの社会関係は，「過程中にある価値」，貨幣から必然的に成長し，すべての人々の生活を支配するに至る「主体であるところの実体」であり，一つの活動的な力であった。

労働者は，「労働」と呼ばれる人間的活動に従事する中で，貨幣・資本などの非人間的形態によって，これら諸形態の必要条件に彼等自身従うことを強制されるのである。彼等は，継続的に彼等に敵対する力を生産し，再生産する活動に彼等自身の活動を仕向けるところの資本の把手に捕まれているのである。この敵対的な関係，賃労働者と資本との関係，それこそが近代社会の土台をなし，それをめぐるすべてのものを彩っているのである。

リカードウが『政治経済学と課税の原理』で行ったように，資本を「生産の手段として役立つ蓄積された労働」と定義することは，黒人奴隷を「黒色人種」と定義するのと論理的に等しい。この論理の奇妙さは明らかである。しかし，経済学者達は資本について同じやり方で考えるのである。

「黒人は黒人である。彼等はある関係の下で奴隷となるのである。綿を紡ぐジェニー紡績機は綿を紡ぐ機械である。それは一定の関係の下で資本となる。この関係から引き

---

[40]『経済学批判要綱』，29：504-5。

離されればそれはもはや資本ではないのは，丁度金がそれ自身貨幣ではなく，砂糖がそれ自身砂糖の価格ではないのと同じである。」[41]

資本に関して最も重要なことは，非人格的活動つまり「生産者の背後で」それが自らを生産し，再生産するその仕方である。その運動は，その生活が資本によって支配されているところの諸個人の活動の産物なのである。しかし，この事実は，彼等から，資本家からも，資本家が雇用し搾取する労働者からも隠されている ── とくに経済学者からは隠されているのである。この魔法の力は，単なる幻影ではない幻影である。それは，現実にそのように**ある**のである。

「資本の蓄積の結果としての労働の価格の上昇は，事実上，賃金労働者が彼自身のために鍛造した鎖の長さと重さがどの程度伸びることが許されるか，ということを意味するのみである。…・労働力は，それが生産諸手段を資本として保持，維持し，それ自身の価値を資本として再生産し，不払い労働の形態で付加的資本の源泉を供給する限りにおいてのみ販売されうるのである。」[42]

資本は敵対的な社会形態である。労働者と雇用主との闘争は，この概念にとって本質的である。それは賃金労働者が商品を生産する際に彼等自身によって生産され，再生産されるのである。以上のことが，資本の性格をめぐる矛盾の中で偉大な経済学者達がおいった混乱が，我々の理解に最も重要な貢献をなしてくる理由なのである。

---

[41] 『賃労働と資本』，9：211。
[42] 『資本論』第1部：769。